

「この上ない喜び？」  
ヤコブの手紙1章1-8節

今日からしばらく、ヤコブの手紙から御言葉を聞いてまいりたいと思います。この手紙は、国外に離散しているキリストを信じるユダヤ人たちに宛てた挨拶の後、「試練に出会うときは、この上ない喜びと思いなさい」という書き出しで始まっています。

試練とは、私たちの生活を一変させてしまうような出来事です。私たちは試練に遭うと動揺し、立ちすくんでしまいます。それなのに、試練に遭ったらこの上ない喜びと思いなさいとは、どういうことでしょうか。ヤコブはこの手紙を通して、信仰者は試練をどのように受け取るべきなのかということをお教え、また試練を通して与えられる大きな恵みについてお教えしています。

私たちはともすると、クリスチャンになったことで平穏無事な人生を送っていき、あるいはそうなることを望んでいるかもしれません。でも、人はこの世で生きている限り、信仰を持っていようがいまいが関係なく、あらゆる種類の患難や試練が付きまどってきます。それらを避けることはできません。しかし、それらは、神さまが信仰者を鍛錬し、成長させ、新しい命を約束された者にふさわしくしていく神の創造的御業でもあるのです。それをヤコブは試練と言います。つまり、私たちが困難に出会っても、そこに神さまの隠れた御心を尋ね求めて行くなれば、それは試練として私たちに鍛え、神さまにふさわしい者としてくださるのです。

もちろんそれは、簡単なことではありません。また長い時間を要することでしょう。隠された御心は簡単には分かりません。私たちは、御言葉に養われ、祈りによって力づけられることで、試練を受け止めていくことができるようになるのです。

では、試練に遭うと、どうしてそれが喜びにつながるのでしょうか。その理由をヤコブはこう言っています。「信仰が試されることで忍耐が生じると、あなたがたは知っています。あくまでも忍耐しなさい。そうすれば、完全に申し分なく、何一つ欠けたところのない人になります」。

ヤコブは、試練があなたがたの中に忍耐を生み出し、あなたがたを完全に申し分のない人にするということです。使徒パウロはローマの信徒への手紙で「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」(5:4)と言っています。パウロが「練達」と言っていることを、ヤコブは「完全に申し分なく、何一つ欠けたところのない人になる」と言い表しているのでしょうか。ただここで言われている「完全」という言葉は、完全無欠の完璧な人間になるということではありません。むしろ、これは、私たちが試練を通して、神の前に信仰者として期待されている状態に成熟することが語られているのです。私たちには、そのような約束、希望があるのです。だからこそ、「試練に出会うことは喜びである」と言うのです。

人生を見舞ういろいろな試練は、信仰者に忍耐を求めます。忍耐は決して楽なものではなく、つらく苦しいものです。しかし、その忍耐を、聖書の御言葉に養われ、祈りから得る力によって担い続けていくとき、私たちの信仰は育っていくのです。

たとえば、聖書には「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています」(ロマ 8:28)という御言葉があります。この箇所を読んだときに、自分の中に何の困難も試練もなければ、「ああ、いい言葉だな」と思って、ただ心に留めておくだけになってしまうかもしれません。でも、御言葉は頭の中に、知識としてとどめておく言葉ではありません。私たちの生活の中で力となっていく言葉でなければなりません。私たちは試練にあったときに、より強く、御言葉が私の心を支える力となっていく体験をするのです。今までは、ただ良い言葉だと思っていた言葉が御言葉となり、具体的な生活の中で、御言葉が私の励ましとなり、慰めとなり、力となっていくのです。どんなに困難が続いても、丁度、地に植えた種が固い殻を破って芽が出てくるように、試練の中で御言葉が私の心の中に深く根付いていくのです。

また、この忍耐によって培われた信仰は、私たちの隣人への助けにもなります。私たちは、社会の中で他者と関わりながら、他者と共に生きています。それと同様に、信仰に生きるということの中には、必ず隣人が含まれるのです。それゆえ、自分のことだけでなく、試練の中にある隣人のために思いを寄せる、その人のために祈り、共に重荷を負い合う者とされていくのです。誰かが試練に見舞われた時、先に試練を受けた者として兄弟姉妹のために祈る、進んでその重荷の一端を担っていこうとする。そのような成熟した信仰者へと私たちは変えられていくのです。